

## お寺が守る自然と生命：風力発電問題をめぐって

山地弘純

### ①お寺が提供するもの

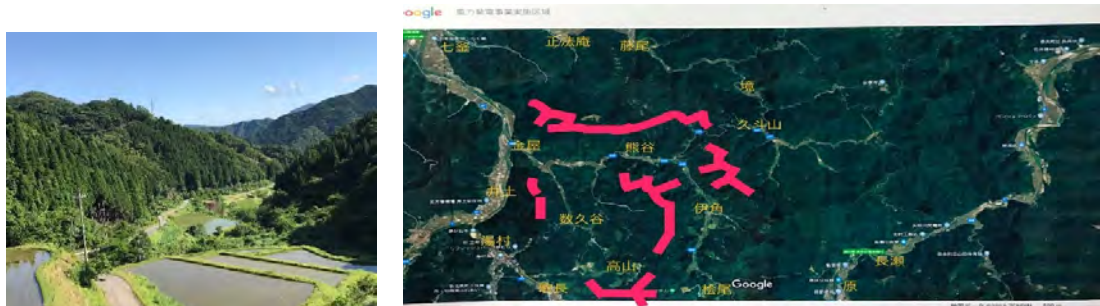
兵庫県北部新温泉町にある善住寺。静かな環境を生かし、日々の喧騒から離れたお写経や瞑想などを提供しています。夏休みに小学生たちの修学会の「寺っ子体験スクール」も人気です。



### ②新温泉風力発電計画

- ・事業者 外資 インドネシアに本社を置くヴィーナエナジーが日本に作った合同会社。
- ・内容 高さ150m、出力4,500kWの風車が21基、山間部尾根沿いに設置する日本最大級の風力発電事業。

新温泉町の過疎地である谷あいの村（熊谷、伊角、数久谷など）を両側わずか500メートル強の距離から風車で取り囲む計画。



温暖化防止のためになるし、いいことだという認識 → 風力発電施設の視察や勉強会開催

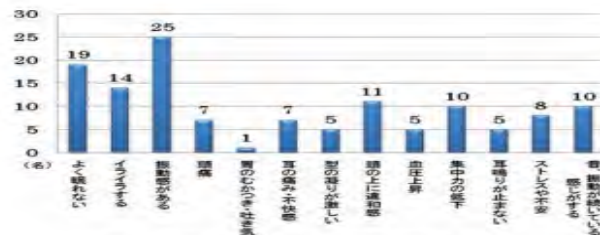


図2 苦情の訴え (「Q5」、複数回答を含む)

### ③この計画がもたらすもの

メリット ◎事業者の利益

◎投資者の利益

◎放置された山林に目が向く

デメリット ◎低周波による健康被害（距離が近すぎる）

◎大規模開発による自然破壊と生態系の変化（自然エネルギーが自然を破壊する矛盾）

どちらともいえない

◎二酸化炭素などの温室効果ガスの削減効果 → 相殺

・風量は一定ではないため不安定であり火力発電のバックアップが必要であり、火力発電は調整しながらの「部分負荷運転」で燃費が悪くなっていること。

・資源産出国の環境汚染が行われていること。

・やみくもに植えた人工林では天然林のような炭素減少効果が見込まれないこと

◎町の経済効果 → 相殺

・固定資産税が入り増収となるが、一方で地方交付税がその分ほど減額されてしまうこと

・雇用もほとんど生まれない

◎地権者の契約条件 → 相殺かそれ以上のリスク

・ヴィーナエナジーの地上権設定契約の中には、「倒産手続申立権等の放棄」まで書かれており、計画倒産をしたとしても、保全手続きの放棄、債権の放棄、清算の放棄などが約束させられることとなります。

つまり、採算が取れない場合、風車を撤去せずにその場に残したまま倒産手続きをし、この一事業のためだけに設立された合同会社は痛みなく倒産。最終的にただの危険物となった風車の撤去は、地方自治体が請け負わなければならないというリスク大です。

また地権者は事業者から地代が支払われますが、土地の固定資産税は地主が納めなければなりません。その際地目が「山林」から「雑種地」に変わることも注意が必要です。

今まで「山林」で安かった固定資産税ですが、風車が建設されると「雑種地」扱いとなり固定資産税額が大きく上昇します。

### ④反対を決めた理由

◎エンバイロメントジャスティス（環境公正）という理念

一部のものだけが利益を得て、地域の人は被害のみを引き受けるという構図の事業となり、環境公正の理念に反します。憲法第14条の「平等」にも反し、法的にも

（例）開発国の利益の影に資源産出国の環境が汚染されていく

（例）白人の富裕層の豊かな生活の影に黒人の貧困層の住む地域に産廃施設や有害化学工場が集中

◎環境アセスメント制度の欠陥

環境アセスメントを行うが、日本は第三者機関ではなく事業者が行い、数字合わせのアセスメントと揶揄されるような実態があることや、地方から厳しい意見があったとしても、その意見が反映されないままに事業が開始されても問題ない制度となっています。鳥取県の平井知事も先の議会でこの点に大きな欠陥があると述べられました。

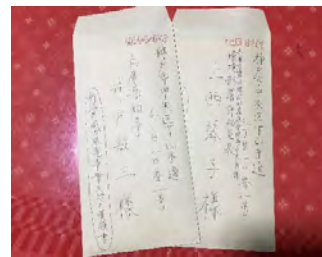
また「戦略的アセスメント」という事業の計画段階で調査・予測するものが欠けているのもあり、いったんプロセスに入った事業は止められず、住民参画の機会もありません。

◎経済至上主義

「玉石混交9割は石」といわれるように本当に環境のことを考える事業者はほとんどいないのではないかという現状。環境は口実で経済利益のみ追求する実態があると知りました。

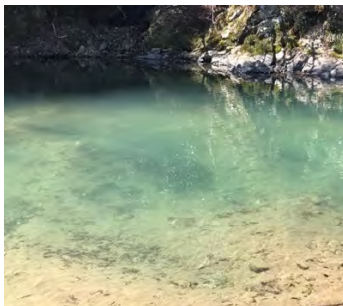
### ⑤いのちをつむぐ会結成

町や県、そして国にまでその声が届くよう、大切なものを守るための活動を始めました。  
町への嘆願書の提出と県への投書、広報誌「みま森」の発行や署名活動、MBS テレビ出演など。



### ⑥この計画があったからこそ気付けたこと

- ・深い森と消毒殺菌なしにそのままにすくって飲めるような美しい水があること。
- ・たくさんの鳥や動物、植物が分布していること（天然記念物イヌワシを含む78種類もの野鳥を確認）
- ・手入れをあきらめ、持て余してしまった人工林があること



### ⑦自然保護活動のきらめ樹との出会い

私たちは風力発電の反対派というより自然保護への賛成派であることを再確認し、改めて大切なこの自然を守り、人と環境の調和した生き方へと見直していきたいと思いました。

そんな時に友人を通じてたまたま出会ったのが全員参加型森林再生活動の『きらめ樹』でした。『きらめ樹』とは「皮むき間伐」のことで、放置されたままの人工林に手を入れてやることで、

健康な森に戻してあげる作業です。

特に大切にしているのは「選木」なのだそう。500年後、自分たちの7代先に目線をおいて、いのちを残す木と、いのちをいただく木とをみんなで見繕っていきます。

こうしていのちをいただく木を皮むきするのですが、これは子供も参加できるものです。剥いた木は一年くらい立ち枯れさせてから伐採します。すると切り倒した木は水分が抜けて軽くなっているので、女性でも運べるというのです。このように子供も女性も誰でも参加できるのがきらめ樹の魅力です。

やがてその場所には光が入り、大地には草花が育ち、鳥や動物たちが帰ってきます。そして残した木々は大きく根をはり、立派な価値ある木に育ち盛り、森はゆっくりと蘇っていくでしょう。

さらにきらめ樹マジックは川も作ります。川のなかった場所に小さな川ができたという報告もあるのだそうです。



この活動を、風力発電を通じて突き付けられた「荒れたまま放置している人工林はどうするの」という問いに対する我々からの回答にしたいと思います。

一年が経ち、きらめ樹間伐材を使ったお塔婆が出来上がりました。全国のお寺さんで使用を考えていただければ幸いです。

我々の間伐量などわずかなことですが、この意識が広がっていき今一度全国に眠る大切な資産に気付いていけば、日本の山々が外資の草刈り場にされることを防げるのではないのでしょうか。

### ⑧最後に伝えたいこと

今後我々に求められるのは、よい再エネと悪い再エネの見極めです。お寺は、人と自然とが乖離しないよう繋ぐ役割を担っていきたいと思います。

最後にこの北米先住民クリー族の言葉を皆さんに贈ります。「最後の木が死に、最後の川が毒され、最後の魚が獲り終えて、ようやく人間はお金は食べられないことに気付くのだ。」

